

探検！言葉の森②

京都教育大学教授

森山 卓郎
もりやま たくろう



まぼろしの 大金持ち、 ゲツキヨウさん

確か私が高校生のころの会話。

弟（当時小学校六年）「おにいちゃん、日本にはものすごい金持ちの人がいるで」

私「へえ、どんな人や？」

弟「あちこち、いっぱい駐車場をもってる人や」

私「へえ、なんちゆう人？」

弟「ゲツキヨウさん、いうのや」

私「ふうん、珍しい名前やな。漢字は？」

弟「『月』『極』や。『月極ガレージ』という会社やってはんのや」……

もちろん、「月極」は、「月ぎめ」。「ゲツキヨウ」さんは、はたして、まぼろしの大金持ちなのであった。

しかし、確かに身の回りの漢字には、なぜそう読むのかがわかりにくいものもある。例えば、「春日」。もちろん「はるひ」と読んでも間違いではないが、なぜかふつうには、「かすが」と読むことになっている。なぜ「春日」が「かすが」というと、「春の日」が「かすか」にかかる枕詞ということからきた読み方である。「春の日のかすか」という組み合わせが、いつしか「春日」かすが」という読み方になったのである（「カスガ」と最後の音は濁っているのだが、このあたりの事情はよくわからない）。

「飛鳥」もそうだ。奈良時代初期の政治の中心地、「アスカ」だが、なぜ「飛鳥」なのかというところ、これも枕詞が関わっている。「飛ぶ鳥の」が「あすか」の枕詞だったことから、いつしか「飛鳥」自体が「あすか」と読まれるようになっていたのだ。

古代人は、ちよつとしゃれたつもりだったのかもしれないが、二十一世紀に漢字を学習するよい子たちにとっては、ややこしい話である。

しかし、現在でも、たとえば飲み屋さん

などで「二升五合」と書いてあるところがあったりする。「ますますはんじょう」というわけだ。「騎士」と書いて「ない」と読むという人名もあると聞く。日本人は漢字が大好きなのだ。

さて、例の「月極」だが、「きめる」を「極」を使って書くことは以前はあった。なんでもいゝ、早（はや）く極（きめ）ねへ。（浮世風呂）のような感じだ。「月極」はそうした名残と考えられる。なんのことはない、かなりノーマルな漢字の使い方である。そんな「月極駐車場」。いっそ、「月極」（「げつきよく」と読む）という駐車場の会社名を登録してしまう、というのもアリかも？

